市民研通信 60

2020年 12月 通巻 206号

続々とオンラインを用いて開催され、その動画が参加者や会員に共有される、依頼講演や市民科学講座。2020年に生まれた、新しい普及啓発活動の形と言えるでしょう。

NPO法人 市民科学研究室

Event オンライン市民科学講座

2020年10月9日（金）▶▶▶2021年9月10日（金）

連続講座「日本の市民科学者―その系譜を描く」（全12回）

市民科学研究室の代表の上田が講師を務める講座がスタートしました。

市民・民衆・住民の命と尊厳と権利を守るために、ある時は「科学」と対峙し、ある時は自ら「科学」を営んで、闘ってきた先達たちの歩みを取り上げます。時代状況のなかで、彼らは何を目指し、何を切り拓いてきたか。私たちは何を受け継いでいるか（受け継げないでいるか）、受け継ぐべきか。これらの市民科学者らが関わった様々な社会事象に応じて10の切り口を設け、その活動の歴史的意義をつなげて考察します。参加者とともに議論しながら、これまで誰も描いたことのない、日本の市民科学者の系譜を、一緒に描いてみます。

第4回 1・8　水俣病と医学・科学―原田正純、西村肇を主にして
第5回 2・12　薬害と統計学・疫学―増山元三郎、高橋晄正を主にして
第6回 3・12　町医者と商品テスト―松田道雄と花森安治
第7回 4・9　洋学・翻訳・啓蒙―幕末と維新の知識人たち
第8回 5・14　農学、自然保護、動物愛護の底流―安藤昌益から現代まで
第9回 6・11　唯物論と科学史と鎌倉アカデミア―三枝博音を主にして
第10回 ～第12回 のテーマは市民研ウェブサイトをご覧ください。

【日時・定員・参加費用】
・どの回も第二金曜日の夜です。19時00分に開始、21時00分終了です。
・質疑応答をしっかり行いたいのでオンラインでの定員は20名とします。また会場（市民研事務所）に直接赴いての参加者は10名までといたします。
・事前に市民研ウェブサイトから参加費500円をオンラインで送金していただくことが必要です。

【申し込み方法】
市民研ホームページから行ってください。電話やメールでの申し込みは受け付けておりません。

Event オンライン市民科学入門講座

1月13日（水）世界で加速するエネルギー革命
1月18日（月）国際放射線防護委員会ICRPの正体を探る

様々な問題に関心を持ち、様々な活動に関わっておられる市民科学研究室の会員の皆さん、そしてその方々のご友人を講師にして、それぞれの方に得意のテーマで「市民科学」を語っていただけないだろうか―そのような意図からこの毎週月曜日1時間のオンライン講座を始めることにしました。どなたでもご参加できます。30分ほどの話題提供の後、30分ほど皆で議論します。奮ってご参加ください。

●番外編（1月13日（水）19時30分～21時30分）
世界で加速するエネルギー革命
講師：永井宏幸さん（市民科学研究室会員）
▶世界の主なプレイヤーもやっとエネルギー転換にむけて本気で踏み出し始めたように見えます。これは、エネルギー転換を地球温暖化を防止するための負荷であるという考え方が、経済的利益をもたらし新たな社会の姿にいたる発展のカードであるという考え方に変わってきたためだと思います。2020年はその潮目の年だったといえるでしょう。調査機関のデータ分析を紹介してこの背景を、以下の構成で解説することにします。
第1章 再生可能エネルギー ／ 第2章グリーン水素 ／ 第3章 激変する世界

●第8回（1月18日（月）19時～20時）
国際放射線防護委員会ICRPの正体を探る
講師：瀬川嘉之さん（高木学校、市民科学研究室会員）
＋柿原泰さん（市民科学研究室理事）
▶福島、チェルノブイリに続く大規模原発事故に備えた文書を出したり、国際会議を開いたりしているICRPとは何なのか、どうして問題なのか、市民はどう対処したらいいのか、みなさんと検討します。

写真：科学技術振興機構「中国科学技術ニュース」より

◇主催：NPO法人市民科学研究室
◇形式：zoomによるオンライン形式
◇定員：毎回25名以内（先着順）
◇参加費：会員ならびに非会員とも無料
◇お申し込みは市民研ウェブサイトの該当ページより

Event

1月27日（水）19時～　新シリーズ「著者に尋ねる」第1回
『紫外線の社会史』（岩波新書）の金凡性さん

第1回　『紫外線の社会史―見えざる光が照らす日本』（岩波新書、2020）の著者、
金凡性（キムボムソン）さんをお招きして
◇日時：2021年1月27日（水）19:00-20:00
◇形式：zoomによるオンライン形式
◇定員：15名（先着順）
◇参加費：会員ならびに非会員とも500円
◇お申し込みは市民研ウェブサイトの該当ページより

2021年から開始する新しい市民科学講座のシリーズに「著者に尋ねる」があります。これはオンラインで、比較的最近に本を著したその著者を招いて、その著者のことを参加者とともにいろいろ議論するものです。市民科学研究室がこれまでに築いてきた、多くの研究者、市民活動の実践家らとのつながりを生かして、「科学と社会」に関わる興味深い本を書いた著者に来ていただいて、市民科学研究室のメンバー（代表の上田をはじめ、理事メンバーや会員さんから選出）とやりとりをします。30分間のトークの後、参加者から自由にご発言いただいて、さらに著者との議論を深める、というやり方です。1時間という比較的短い時間ですが、きっと刺激的な中身の濃いやりとりになると思います。有料（500円）となりますが、ぜひご参加ください。

Event

恒例の新年交流会、参加申し込み受付中！
2021年1月9日（土）10日（日）の18:00から

今回はオンラインでの初めて試みになりますが、そのための特別の工夫をいろいろ凝らした、楽しい集いとなります。

下記のような面白い企画など、いろいろ用意しています。
どなたでもご参加ください。

2020年を振り返りつつ2021年を乗り切っていく新たな活力を得ていただければと思います。

皆様のご参加を心よりお待ちしております！

2021年1月9日（土）及び1月10日（日）のいずれも18:00～20:00です。どちらか都合の良い日をお選びください。市民科学研究室ウェブサイトに申し込みフォームがあります。
申し込まれた方には、zoomで参加するためのURLを当日の朝にメールでお送りします。

申込時に以下の4つから1つ以上を選んでおくことになります
①私のイチオシ（グッズ、思い出など何でも）：写真を添えて
②10分で作る一品料理：休憩時間に調理
③スライドで語る「これもありだよ、市民科学」
④買ってみました、オススメ食材・食品

市民研へのご入会／ご寄付のご案内

市民研の活動は会員となってくださる方々の会費やご寄付によって支えられています。
市民研の活動にご賛同いただける方、支援をしていただける方には、ご入会やご寄付をお願いいたします。
ご送金・ご入会・ご寄付につきましては以下のやり方でお願いしています。

●100円単位の送金　100円単位のカンパや少額の送金（郵送費など）にご利用ください。
市民科学研究室の新しいウェブサイトのメインメニューに「ご支援のお願い」があります。そこから「市民研オンラインショップ」のサイトにつながります。そのなかに、「一口100円ご送金」のカートがありますので、ご利用ください。

●会員登録　年会費を送金して次のいずれかの会員になることができます。
★レイチェル会員……年会費　10,000円（総会における議決権あり）
★ダーウィン会員……年会費　3,000円
会員になると、以下のサービスを受けることができます。

1．隔月の機関誌『市民研通信』の送付（会員は全文アクセス可、非会員には有料の記事論文あり）
2．市民研メーリングリストへの全会員の登録
3．市民研の各種研究会への参加（オンラインでの参加を含む）
4．市民研主催のイベントで参加費が半額になりかつ同伴者割引も
5．市民研が刊行した出版物の寄贈（レイチェル会員のみ）
6．会員間講師派遣制度の利用（この内容についてはウェブサイトの該当ページを参照のこと）
7．市民研主催の市民科学講座・各種イベント・研究会での配布資料、市民研の代表や理事メンバーらが講師として招かれた講演などの配布資料のうち、公開可能なものから精選して送付
8．市民科学研究室所蔵の書籍・文献資料や映像資料の借り出し（期限1ヶ月）

●ご寄付　一口1,000円から受け付けております。
ご送金の方法は以下のいずれかでお願い致します。

郵便振替……口座加入者名：市民科学　振替口座番号：00160-4-608503
オンライン決済……市民研ウェブサイトの「参加費前払い　出版物・販売物」から

NPO法人 市民科学研究室　〒113-0034 東京都文京区湯島 2-14-9 角田ビル2F
Tel: 03-5834-8328 Email: renraku@shiminkagaku.org

Article

山口 直樹（北京日本人学術交流会責任者）

連載「日中学術交流の現場から」第５回

北京から第五福竜丸元乗組員の市民科学者、大石又七さんへの手紙　第二便

はじめに

拝啓　大石又七さま

こんにちは。山口直樹です。前回書いた第一便に続き、第二便をお送りします。

5. 大石さんが、キリ島で出会った多田智恵子さんに仙台で会いました。

大石さんは、原水協の企画により2002年2月26日から3月10日までの日程でマーシャル諸島を訪問されたそうですね。核の実験場にされて、生活の場を奪われたマーシャルの人々と交流する機会を持てたことは非常に貴重であり、有意義なことではないかと思います。第五福竜丸の元乗組員では大石さんが、はじめてですね。

そして3月3日、4日には、マーシャル群島のキリ島をも訪問されたそうですね。

アメリカは、1946年1月にビキニ環礁を核の実験場に決め、島民たちを強制的にロンゲラップ島に移住させ、1948年からキリ島で暮らさせるようになったとのことですが、このキリ島は、別名、監獄の島と呼ばれているとか。援助漬けにされた人々は、特にすることもなく働く意欲をそがれていたそうですね。

そのような島で大石さんは、日本から来ていた多田智恵子さんと出会っています。大石さんはその時のことをこう書いています。

「俺はマーシャルを訪問中、一人の日本人女性に出会った。青年海外協力隊としてキリ島に来ていて小学校の先生をしていた宮城県出身の多田智恵子さんだ。この小さな島に1000人もの人が住んでいる。その中で日本人はただ一人、それもうら若き女性、よほどの強い意志と信念がなければ務まらないと思った。……

【続きは市民研HPにて】

北京大学で、原子力を考える緊急特別報告をする著者

Article

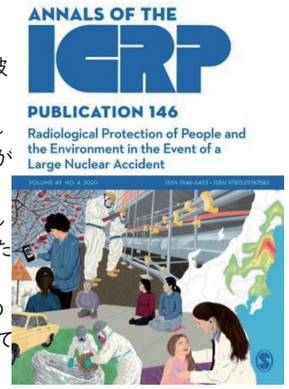
上田昌文（NPO 法人市民科学研究室・代表理事）

市民のための放射線防護の要件とは

—ICRP新勧告草案へのパブコメを手がかりに—

2020年12月11日にICRP（国際放射線防護委員会）の新勧告（ICRP Publications 109およびPublications 111を改訂して新たに作成されたPublications 146）が公表された（注1）。それは、まず2019年6月に草案が示され、次にその草案に対してのパブリックコメントを受け付け（締切りは2019年10月25日）、そして約1年をかけてそのパブコメの内容を検討して必要な改訂を行った結果、出来上がったものである。

市民科学研究室を含む日本の市民団体8団体（注2）の働きかけによって、パブコメは、従来は英語のみの投稿しか受け付けなかったところを日本語による投稿も受け付けることとなり、しかも当初決めていた締切り（8月24日）が10月に延期された。すなわちこれは、2019年の8月から9月にかけて、先の市民団体などが各地で学習会を開き、東京でICRP委員を招いて市民との討議の場を設け、記者会見を行うなどの、一連の活動によって得られたものである（注3）。そして、パブコメは総数で約300件に達し、放射線防護の非専門からのものがかなりの割合を占めるというICRPにとってかつてない一般からの反応が示されることになったのも、やはりこの活動の成果と言えるかもしれない。全体の約83%が日本人からの投稿であり、その中に含まれる福島事故被害者（全体の約9%）や原発・放射線問題に取り組む日本の市民団体（全体の約25%）からのものではとりわけ、草案にみられる福島事故のとらえ方への厳しい批判や詳細な代替案の提示がなされているものが少なくない（注4）。



新勧告がはたしてどの程度に、そうした批判や代替案をきちんと取り込んだものとなっているのか—これこそがパブコメを寄せた方々をはじめとする多くの市民の関心事であろう。その点については、2月20日（土）に開催が予定されている、ICRP委員でこの新勧告の作成メンバーである甲斐倫明氏と本間俊充氏を招いての市民とのオンライン討議の機会……

【続きは市民研HPにて】

Article

瀬野 豪志（NPO 法人市民学研究室・理事）

新連載　美味しい理由—「味の素」の科学技術史　第１回

美味しさと健康（1）池田菊苗の談

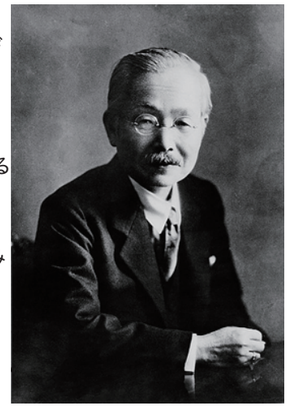
「美食倶楽部」の人々

彼らのうちの三人までは糖尿病にかかり、そうしてほとんど全ての会員が胃拡張にかかっていた。中には盲腸炎を起して死にかかったものもあった。が、一つには詰まらない虚栄心から、また一つには彼らの信奉する「美食主義」にあくまでも忠実ならんとする動機から、誰も病気などを恐れる者はなかった。たとえ内心では恐れていてもそのために倶楽部から脱会するほどの意気地なしは一人もなかった。「われわれ会員は、今に残らず胃癌にかかって死ぬだろう。」と、彼らは互に笑いながら語り合っていた。（中略）彼らは明け暮れげぶげぶともたれた腹から噫を吐きながら、それでも飽食することを止めずに生き続けていくのである。（谷崎潤一郎「美食倶楽部」）。

「美味しさ」は、食べることによって得られる快楽である。しかし、それも度が過ぎれば「健康」を害するかもしれない。いくら「美味しさ」に執着していても、内心ではそのような不安を抱いているはずである。「美食倶楽部」の会員たちが繰り返している食事は、かなり極端ではあるが、食生活における「美味しさ」の一つのあり方を示している。彼らが求めているのは、一流の料理人による貴重な「美食」であり、いつもの味がするような食事ではない。その「美味しさ」は、みずからの健康を度外視するほどの、過剰な食習慣に溺れさせる可能性を秘めている。

心のどこかでは誰もが思っていることであろうが、飽食の時代と言われて久しい今日、嗜好品、お菓子、「ジャンクフード」、自分好みの味付け、恒例行事の御馳走と、正直なところ、普段食べているものの「美味しさ」と健康は必ずしも両立しているわけではないだろう。よく考えれば、必ずしもどころではなく、「美味しさ」には悪い遊びのような快楽もある。……

【続きは市民研HPにて】



Article

山根伸洋

【新連載】　開発主義政治再考　第１回

開発主義政治の第三段階に向けて—開発主義政治の遺産継承をめぐって

0. はじめに—清算主義を乗り越えて—

多くの論者が指摘するように、日本の近代の始まりは19世紀の半ばとすることに異論が唱えられる余地は少ないと思う。しかし、何故、この時期なのかという点になると、多様な角度からの考察が可能となるだろう。そこには日本列島の地政学的な位置の問題からくる軍事を含む外交的な圧力の問題、ないし、それに起因する国内政治の動揺、そもそも幕藩体制が揺らいでいたなど、ないしはアヘン戦争をはじめとする中国大陸における西欧列強の展開などもそこに含まれるだろう[i]。いずれにせよ、この時期に「軍事」という観点から積極的に外来の知識を導入した軍事工業化が国家的課題として据えられた。日本の近代はその意味で言えば、明治政府の国策でもあった富国強兵から殖産興業へと軍事を基軸とした産業化によって最も強く特徴づけることができる。軍事部門に引きずられて在来産業部門の技術革新も進んだし、国防という観点から国土全域を見据えての交通・通信インフラの開発政策が遂行された。近代日本、すなわち幕末から明治期にかけての日本は、そのはじまりより国土全域において開発主義政治が展開され、その開発政策を軸として地域社会が動員され組織化されてきた、そのように概括していいのではないかと現在私は考えている。……

【続きは市民研HPにて】

『岩手のTVA』という1952年に岩手県が刊行したパンフの表紙

Article

土屋 至（認定 NPO 法人おもしろ科学たんけん工房）

子どもたちと「おもしろ科学」を遊ぶ

Evangelist土屋至のハイブリッドな生き方

わたしは1947年生まれ。団塊の世代1期生である。73年余、実におもしろい時代を生きてきたと思っているわたしの経歴を紹介したい。

横浜で生まれ横須賀で育った。どこの家にも子どもが何人かいてその子どもたちは地域子ども社会を作っていた。大人はほとんどそれに関わるゆとりがなく、年長の子がリーダー（番長）となって、その集団を仕切っていた。子どもたちは近所の路地や広場に集まり、その頃はやっている遊びをしていた。メンコ、ビー玉、こままわし、ベーゴマ、たこあげ、竹馬、缶蹴り……。年長の子は年下の子にその遊びをおしえていた。さながら子どもたちの自治共和国であった。ただし、男の子と女の子は遊びの中ではほとんど交わることなく、別々の遊びをしていた。遊びはこうして伝承されていった。

しかし、その多世代交流型縦割りの子ども社会を学校の同年齢別集団、テレビや塾、お稽古事などが崩していき、地域子ども社会による遊びの伝承は途絶えることになる。このような地域子ども社会が存続したのは昭和35年頃まで、団塊の世代が小学校を卒業したころにはきえていくことになる。

わたしは1965年大学に進学、大学はベトナム反戦運動から学園闘争に突入。連日クラス討論がつづき、集会やデモにかり出されていった。全共闘世代である。専攻は教育社会学で教員志望であったが、ほとんど専攻の学問を学ぶことなく、教職単位の取得もできずに大学を押し出された。

本来だったら大学院に進学するつもりであったが、大学に失望し、進学を諦め、教員になることもあきらめ、新聞広告の求人欄にひかれて小さな印刷会社に就職した。……

【続きは市民研HPにて】

Article

上田昌文（NPO 法人市民科学研究室・代表理事）

市民科学は感染症（拡大）予防に寄与できるか

●COVID-19への公衆衛生上の課題の2分類

この新型コロナウイルス（COVID-19）への課題としてまず語られるのは、

1）発症関連：予防、感染の拡大の防止＋重症化防止、治療、後遺症への対処

であるが、次の点を見落とすわけにはいかない。

2）日常生活関連：社会経済活動の変容→自粛・封鎖に伴う、心身のダメージへの対応

この「心身のダメージ」は、休業や倒産、失職や解雇などによる収入減に起因するものが多いと考えられるが、人との交流が絶たれたことによる孤独感や精神的不安などもかなり関係すると想像される。

これらの課題に対して、ここ20年ほどの間にとりわけ欧米において活発になってきたCitizen Science（以後、この英語を「市民科学」と言い換える）（その取り組みの主だった特徴については文献1を参照のこと）はどう対応したと言えるだろうか。

●「市民科学」のアプローチ

上記1）の発症関連に対しては、

①個人の行動履歴モニタリング→データ集積→感染状況の把握と効果的な対策

②PCでのゲームやパズルをとおして抗ウイルスタンパク質の設計などの科学研究（補佐）

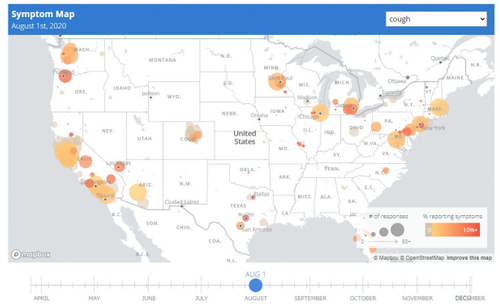
③マスクの提供など、具体的な予防手段の開発・普及

④感染症に関する進行状況や対策に関する情報のわかりやすい提供（啓発）

に大別される活動がある。

①は、主としてスマホアプリを用いた「クラウドサイエンス」「オープンサイエンス」の手法によって、感染症の抑え込みのために必須となる感染状況の把握がより素早く、大規模に、的確にできるようにする、というものである。これについては後に詳しく述べる。……

【続きは市民研HPにて】



COVID-19 Citizen Scienceのマップより8月1日のデータを表示させて